

〔コメント〕

## 戦争史とオーラル・ヒストリアン

中 野 聡

本コメントの筆者（以下、私）は、基本的には文献史学の方法により国際関係史（米比関係史、日比関係史）と取り組んできたが、1990年代前半にトヨタ財団計画助成「日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム」（研究代表者・池端雪浦）に参加し、文献史料の蒐集とあわせて存命の関係者に対するインタビュー調査を実施し、またその一部をインタビュー記録として編集刊行する作業に加わる機会に恵まれた<sup>1)</sup>。この経験が忘れがたく、その後も文献史料を補充する目的で、日本のフィリピン占領史、フィリピン系第2次世界大戦退役軍人（ベテラン）の対米移民問題、冷戦期米比関係史などに関連して、接触可能な存命の関係者がいる場合には、できるだけ連絡をとって話を聴くようにしている。そういう事情もあり、今回の多様な分野・世代にわたるオーラル・ヒストリアンの皆さんの報告を聞き、門外漢ながら感銘を受け、頷いたり首をひねったり、ある種の感想をもつ程度には、口述史学の問題に関心を抱いてきた。そのような立場から、ほぼシンポジウム当日の発言に沿って、若干の感想と疑問を提示してみたい。

歴史学研究会が口述史学を本格的に検討するのは1987年以來であるが、今回の企画の特徴は、大久保由理氏をはじめとするオーラル・ヒストリーの若手の実践者たちが、その研究上の悩みを先輩のオーラル・ヒストリアンや聴衆にぶつけてみたいという動機から企画が生まれた点にある。もちろん狭い意味での方法的な悩みは分野を問わず誰もが抱えているし、史実を確定する難しさといった史料批判上の問題は、文献史学・口述史学を問わない永遠の課題でもある。むしろこうした方法的問題以上に（とはいえ最後は方法に帰る問題ではあろうが）、私が準備会とシンポジウムを通じて感じたのは、オーラル・

ヒストリアンの研究倫理をめぐる悩みと心の痛みであった。

ニューギニア戦を中心にインドネシア人兵補問題と取り組む前川佳遠理氏は、当該主題に関して文献史料を徹底的に渉猟したうえで、その限界を痛感し、口述史料を日本、インドネシア、オランダなどにわたって可能な限り蒐集してきた。中尾知代氏は、研究の発端そのものが留学先のイギリスでの——日本人であることを知ってイギリス人元捕虜に厳しい言葉を吐かれたという——経験から始まり、現在では、日本、アジア、欧米を跨いで捕虜問題・和解問題を中心に口述史料の蒐集や捕虜団体・戦友会行事等の参与観察を展開している<sup>2)</sup>。

このようにその出発点は異なるが、現時点で両氏が抱えている悩みは共通している。またそれはおそらく戦争史と取り組む日本のオーラル・ヒストリアンたちによって大なり小なり共有されていることだと私は思う。インタビュー（以下、語り手）とインタビュアー（以下、聴き手）が戦争体験のトラウマを共有してしまうことや、外国人被害者から日本人として詰問されることに伴う心の痛み。語り手が封印していた過去を引きずり出し、トラウマを再体験させたり罪責の念を抱かせたりする権利が研究者にあるのかという問題。そして誤解を恐れずに指摘すれば、戦争史をめぐるオーラル・ヒストリアンにおけるジェンダーの偏り。なぜ女性研究者に偏っているのか。なぜ彼女たちが悩まなければいけないのか。両氏の報告や著作から私は、こうした問題をめぐる悩みや心の痛みを想像したのである。

方法上の問題として整理しなおせば、それは語り手と聴き手の関係性の問題なのだともめることができるだろう。この関係性について、シンポジウム前半で報告した桜井厚・清水透の両氏そしてこの企

画の「影の報告者」とも言うべき故・保莉実氏の魅力的な遺著が出している答えは、語り手の歴史実践にどこまでも誠実に寄り添うという視点である。さらにこの視点を歴史叙述として（桜井氏は社会学からのアプローチであるが）作品に結晶化する具体的な方法としては、聴き手と語り手の対話性や叙述の多声性を大事にする、そういう方向性が示されている。三氏の著作は、いずれもその実践に見事に成功している<sup>3)</sup>。

もっとも、多様な生身の声のある歴史叙述に収斂させることは、誰にでも、またどのような主題にでも可能なわけではないかもしれない。またそのような歴史叙述は——私などには決定的に不足している——著者の強靱な主体性を要求するようにも思われる。むろん強靱な主体性に裏づけられた歴史叙述の望ましさに異論を唱えるつもりはない。ただ、どこまでも他者の歴史実践に寄り添う姿勢を貫く作品が、結果として主体としての著者を浮き彫りにするならば、それは語る側の歴史実践にどこまでも寄り添ったことになるのだろうか、という疑問も頭をよぎる。むろんこれらの課題を両立させることは可能だろう。しかし、姜徳相氏の言葉を借りれば日本の朝鮮支配と同様に「まだ解放されていない過去」であるアジア太平洋戦争史の歴史叙述において、それがいかに可能かという「弱気な疑問」に、私はある種の精神論をもってする以上の答えを自分で見つけることができないのである。

戦争史の場合、連合軍捕虜やその家族・遺族、日本側の旧日本軍人・軍属の生還者や遺族といった人々は、それぞれが岩のように硬いモデル・ストーリー（桜井氏）を懐に抱いたコミュニティを形成している。彼らから見れば、社会は彼らを忘却し、過去を忘却している。彼らの歴史実践に対する要求は強烈である（中尾氏に詰め寄った元捕虜の行方も、ひとつの歴史実践である）。しかも彼らのモデル・ストーリーは、あまりにも多くの場合、国民国家の境界線をはさんで、せめぎ合い衝突している。彼我の関係者の聴き取りを進める前川・中尾両氏の報告は、そのまま、せめぎ合い衝突するモデル・ストーリーと歴史実践の十字砲火に歴史家が巻き込まれている現実を証言している。

その辛苦や焦燥感を多少は想像できる者として私が出すことができる答えは、いかにも無責任だが、叙述で解決することよりも大切なことがあるかもしれないということくらいである。中尾氏は口頭報告のなかで自身の仕事について「独りで出来ることではない、もっと他の人にもやって欲しい」と述べた。この発言にはオーラル・ヒストリーを公共財として残すことへの強い意欲と責任感が表れている。だとすれば、戦争史をめぐる人々の歴史実践にあえて巻き込まれて史料を残すこと（口述史料の場合は創造することにもなる）の方が、叙述よりも大事だとは言えないだろうか。

もっとも私には、このような感想を、まだ職を得ていない若い研究者に正面から語る勇氣はない。文献史料にせよ口述史料にせよ、その蒐集とアーカイヴス化が独立した業績として高く評価される環境が日本には欠けているからだ。私が関わった「日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム」の場合は、公共財としての史資料を残す、あるいは（インタビュー記録の出版というかたちで）創出するという目的が明確で、共同研究の成果報告書としての論文集は付録に過ぎず、発見史料の復刻やインタビュー記録の出版があくまで本筋のプロジェクトであった。そういう仕事が評価される仕組みが必要ではないかと思う。

最後に、コメンテーターとして私は報告者に対して四点にわたり質問をしたので、記しておく。

第1に、先ほど指摘した戦争史をめぐる口述史学におけるジェンダーの偏りと関連して、オーラル・ヒストリーにおけるジェンダー要因について、その有無も含めて各報告者の見解を求めた。

第2に、戦争史におけるように、対象となる「コミュニティ」が強固なモデル・ストーリーを有する場合、研究者はそれを壊して別のストーリーを聴き出したい「色気」が出てしまいがちである。モデル・ストーリーとは壊すものなのか、あるいは壊れるのを待つものなのか。何かそこに方法論はあるのかということ、桜井氏にお伺いした。

第3に、対話的なインタビューの実践について、インタビューが対話的であることの積極的な意義は評価できる一方、戦争史では、対話的インタビュー

がトラウマをめぐるカウンセリングや治療の意味をともなうことにつながることもあり得る。歴史研究者においてそのような訓練の場は皆無であるが、どのように考えたら良いか。このことについて諸氏の見解を伺った。

最後に、日本中の研究室に眠っている未刊行の口述史料（テープ、ビデオを含む）は、その帰属を問わず公共財として捉えてゆくべきか、また公共財として残してゆくことが倫理的・方法的・実践的に可能か。この点について各氏の見解をお伺いした。

- 1) インタビュー記録として、日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』龍溪書舎、1994年。筆者が編集刊行にかかわった復刻史料として、比島軍政監部編『復刻版 比島調査報告』全2巻、龍溪書舎、1993年；人見潤介・寺見元恵・中野聡編『編集復刻版 第

14軍 軍宣伝班・宣伝工作史料集』全2巻、龍溪書舎、1996年。論文集として池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』岩波書店、1996年。インタビュー記録を利用した同書所収の拙稿として、中野聡「宥和と圧制——消極的占領体制とその行方——」、23-58頁。

- 2) 以下の著作を参照。前川佳遠理「アジア人兵士とBC級戦犯裁判——太平洋戦争末期におけるニューギニア戦線とインドネシア兵補——」『上智アジア学』19（2001年）、87-107頁；中尾知代「戦争・植民地にかかわるビジュアルオーラル・ヒストリーの方法」『史料資料ハブ地域文化研究』2（2003年9月）、31-49頁。
- 3) 以下の著作を参照。桜井厚『境界文化のライフ・ストーリー』せりか書房、2005年；清水透『エル・チヨン』の怒り——メキシコにおける近代とアイデンティティ——』東京大学出版会、1988年；保苺実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践——』御茶の水書房、2004年。

（7頁より続く）

うである。資料がないから聞き書きを始めた。朝鮮史研究会〔朝鮮近代史料研究会〕も資料がないので聞き書きを始めた、朴慶植さんも同じである。こういうことだと思うが、資料づくりをする上で注意すべきは口述する方の話というのはたいがい自慢話に流れる。それから美化する。これが第1点である。それを克服するためには設問をよく準備しある特定の考えで相手を追及するのではなく、先方の話に合わせながら、本当はこうじゃないかと問い直す必要がある。ただし、そのためには双方の信頼がなければならぬのであって、1回ではだめである。何回も会って話をし、そういう形の中で信頼が出てくると証言プラス個人の日記や関連組織や団体の資料ま

で提供される例もある。それから一人の証言ではなくて、複数の証言を取る、これが大事だと思う。そして先ほど言ったように文献資料と重ねてみる。そしてもう一つは事件当時の文献、新聞雑誌などとも照合してみる必要がある。そのつみかさねのなかで見ることのできない一つのかくされた極秘の事実が出てくるということである。おそらく聞き書きをやった方々はみんな同じ体験をされたと思うが、私自身はそういうことを感じている。

\*本稿は、2005年4月3日に行われた歴史学研究会総合部会「シンポジウム 方法としての「オーラル・ヒストリー」再考」での報告を編集部で文章化し、姜徳相氏に加筆修正していただいた。（歴史学研究会編集委員会）